

まそのりやのぞみとのお母さんの話

まそのりやのぞみはふたこのきょうだいとして、出産予定日より二カ月も早く生まれてしまいました。二人の体重は二〇〇〇グラムもななく、ぶつうの子の四分の一か五分の一、自分で「きもちすくすく」ともどきなくて、保育器の中になかわれていて、「じょうぶな体になどあげられず」「じゅめな」と思い、とてもくやみました。

まそのりやのぞみは順調に育っていると思っていたのですが、生まれてから一カ月後、のぞみが水頭症（みづかぶ）（頭の中に水がたまる病気）と知らされました。お医者さんから、「二才まで生きられるかどうか分かりません」と言われ、なみだが止まりませんでした。目も完成してないうちに生まれてしまったので、手術や治りようをしましたが、結局、のぞみの片方の目はほとんど見えなくなってしまいました。その後、まそのりやのぞみもだんだん大きくなっていきましたが、まそのりは自分のやりたいことだけやって、友だちとかに目を向けようとしませんでした。のぞみは少しずつしゃべれるようになってきましたが、二才を過ぎても歩けませんでした。

まそのりやのぞみを育ていくうちに、近所の子どもたちといっしょに楽しく遊んだり、学んだりすることを教えてあげたいと思いました。まそのりはまわりには見向きもせず、自分のやりたいことだけをやるという子だったので、友だちと過ごす楽しさ、友だちっていいもんだよっていついかなか知ってほしいと思いました。

のぞみが二才のとき、町内からサニーランドに行きました。そのとき、のぞみはまだ歩けな



とがでまなぐへて、おしじでゆかをすめまじにして移動していました。その様子を見て、町内の子たちがのぞみに向かって、「気持ち悪い。あつち行け」と言っておわいでいました。私はその言葉を聞いて、じくへてなみだが止まらず、トイレに閉じこもって、出ていられませんでした。

小学校に入ってからつれいじじいがありました。

四年生のとき、全盲リレーがありました。私は保護者席からその様子を見ていましたが、まそのりが走るときはたくさん友だちがいっしょに走って、まそのりに声をかけてくれました。のぞみは半分ほどのきよりしか走ることができませんでしたが、走り終わるとのぞみをむかえにいってくれる子がいました。

競技が終わって自分の席にもどるときも、だれかが必ずまそのりやのぞみの横についていてくれました。

まそのりやのぞみのまわりには気持ちのよさをいじ子がたくさんいて、とてもうれしく思いました。「この小学校に通って、たくさん友だちと出会えることができて、よかったな」と思っています。

まそのりが三年生のとき、他の学年の子からボールを投げられたことがありました。まそのりはいやがっていて、その子は「バーカ」と言っていていいたようですが、そのときいっしょにいたお友だちが「まそのりはいやだったさう」と同じ気持ちになってくれ、「やめて」と言ってくれました。先生も動いてくださり、にげていった子はまそのりの前であやまったようですが、そのお友だちが勇気を持って相手の子に話してくれたら、とてもうれしく思いました。

親と同じまじい、まそのりやのぞみのまじいを大切に思っていてくれる友だちがいること、本当に心強く思います。

みなさんの中には「障害」を持っている人は「不幸だ」「かわいそうだ」と思っている人がいるかもしれませんが、それはいけません。それはまちがいです。決して不幸ではありません。まそのりものぞみも毎日楽しく生きてい

ます。ただ「障害」を持つことはいま、こまな血を思ひわたしたり、いじめや差別をうけたりすることが、その子についてまわってこまな血をいじめたり、いじめたりすることです。

まさのりさんとのぞみさんのお母さんのお話（小学校高学年向け）

A 教材設定の意図

「『障害』を持つている人は不幸ではない。『障害』を持つていることで差別されることが、その子にとって生きていくことを辛くさせている」というまさのりさんとのぞみさんのお母さんの言葉は、「障害」者差別の本質をつく言葉である。

「障害」を持つ子や親が地域で生きていこうとするとき、問われるのは周りの人間である。差別する側に回り、その子や家族が生きていくことを辛くさせるか、仲間としてその子を大切にし、その子が差別にさらされたとき、その痛みを自分のものとし、ともに差別と向き合っていくのか。後者によって「障害」を持つ子もひとりの人間として地域で生きる心地よさや人とながる喜びを感じ、たとえ差別にさらされてもみんなに元気づけられながら、差別と向き合っていけるのである。

この教材は観念的な言葉でなく、事実でそのことを示している。本教材を通して「障害」ばかりでなく、辛い立場に置かれている仲間に対して、自分は具体的にどういう行動をとったか、また、これからどういう行動をとっていくのか考えてほしい。

しい。

B 教材の解説

本教材は、まさのりさんとのぞみさんのお母さんが、二人が在籍する松任市立旭丘小学校四学年の子どもたちに向かって話をもとに教材化したものである。

「障害」を持つ二人のありのままの姿を受け止め、地域でいっしょに生きていこうと考えたお母さんは、友だちと過ごす楽しさ、友だちについていいもんだよっていうことを知ってほしいという願いで町内の行事に参加した。そのとき、のぞみさんに向かって、「気持ちを悪い。あっち行け」町内の子どもたちが騒ぐ。そのときのぞみさんのお母さんのやり場のない哀しみが話から伝わってくる。

小学校に入るとまさのりさんものぞみさんもたくさんの友だちと出会い、楽しい学校生活を送るようになる。そして、他の学年の子にまさのりさんがボールを投げられ、「バーカ」と言われたときに、いっしょにいた友だちが「やめて」と言う。ま

(2) 「障害」者差別は障害を持つ人の問題ではなく、周りの人間の問題であることをいねいにおさえる。

D 参考資料

・「いろんな子がいるからおもしろい」

徳田茂編著（青樹社）所収

「いろんな人たちと出会えて」 橋爪由美子

・挿し絵 松崎厚（金沢市立野田中学校）

私たちは、「障害」を持つている人を「不幸だ」「かわいそうだ」と思いがちである。しかし、まさのりさんとのぞみさんのお母さんは、「障害」を持つている人は決して不幸ではない。ただ「障害」を持つていることで、差別されることがその子にとって生きていくことを辛くさせているということを、事実を示しながら訴えている。

そして、親として一番うれしいこと、心強いことは、親と同じように二人を大切に思ってくれる仲間の存在だと言う。この話は、自分は差別する側の人間になるのか、仲間として差別の痛みを自分のものとして、それを具体的な行動として表すのか、仲間としてのありようを問い返してくれる。

C 指導上の留意点

(1) 「障害」児のいる学級では、その子とのこれまでの関わりを振り返り、仲間としてのありようを問い返させたい。

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言

児童の活動・指導の要領

一 導入

①みなさんは「障害者」という言葉からどんなことを思い浮かべますか。

①頭に浮かぶことを自由に知らせる。

二 展開

②プリントを読みましよう。

②まさのりさんとのぞみさんのお母さんが四年生の子どもたちに話した文であることを知らせる。

③まさのりさんやのぞみさんはどんな子でしょうか。

③「障害」児という意見も出てくるのが予想される。そのときはそうであることを率直に伝える。

④お母さんがまさのりさんやのぞみさんを育ててきて涙がとまらなかつたときというのはどんなときですか。

④・お医者さんからのぞみさんが「三才まで生きられるかどうか分かりません」と言われたとき
・のぞみさんがサニールランドで町内の子に「気持ち悪い。あっち行け」と言われたとき

⑤お母さんがうれしいと思ったのはどんなことですか。

⑤・運動会でたくさんの友だちがまさのりさんやのぞみさんといっしょに走って声をかけてくれたり、迎えに行ってくれたこと
・まさのりさんが他の学年の子からボールを投げられ「パーカ」と言われたとき、いっしょにいた友だちが「やめて」と言ってくれたこと

⑥お母さんは「障害」を持った子が生きていくことをつらくさせているのはどんなことだと言っていますか。

⑥このことがお母さんが二人を育てていく上での願いであったことをおさえる。
⑥「障害」を持っていることではなく、「障害」者に対する差別が「障害」者を生きにくくしていることをおさえる。

三 まとめ

⑦このお話を読んで感じたことを話し合ったり、書いてみましょう。

⑦一人ひとりの思いを大切にし、自由に書かせる。出てきた学級の課題については次時につなげる。